



安芸の宮島「厳島神社の大鳥居」

慶應義塾大学 広島通信三田会報

みやじま

第54号

2018年7月

慶應義塾大学 広島通信三田会

目 次

福澤諭吉の【人間交際（じんかんこうさい）】のすすめ・・瀬戸田誠	2
春期幹事会京都で開催・・・・・	2～3
春期幹事会、懇親会に出席して・・・・・	3
私の近況・・・・・	4
過疎地のまちづくり・・・・・	5～8
広島文化・自然と慶応社中に感謝・・・・・	8～9
塾情報 2018年4月通信教育課程の新規入学者数・・・・・	9～10
広島慶応倶楽部総会、懇親会・・・・・	10
編集後記・・・・・	10

福澤諭吉の【人間交際（じんかんこうさい）】のすすめ

H元・経済学部卒 瀬戸田 誠



福澤諭吉は「学問の究極は人間交際なり」と。(世の中に最も大切なるものは人と人の交わりなり—是即ち一つの学問なり)・・・「豊前豊後道普請の説」といい、「凡そ世の中に学問といい工業といい政治といい法律というも、皆人間交際のためにするものにて人間の交際あらざれば何れも不用のものたるべし。交際愈々広ければ人情愈々和らぎ、戦争を起こすこと軽率ならず」（「学問のすすめ」九編）と説く。福澤諭吉は、「人間交際」のモデルとして交詢社を作った。

社交倶楽部という側面もあったが、むしろ目指したのは情報交換のネットワークであった。あらゆる垣根を取っ払い、情報格差をなくすことを主眼とした。この、福澤先生の目指した気風・伝統を受け継ぐものが【三田会】であろう。私たちが在学中学んだ事の総集編が三田会といえる。三田会を通じて、【人間交際】を広げ、世間を広くすることが究極の学問であろう。その意味において、三田会活動は、広く、通信教育課程の通信三田会だけでなく、地域で、職場で、学部で、同期生でと多々ある三田会に参加することが有用であろう。生涯その輪を広げたいと私は思っています。

春期幹事会京都で開催

5月26日、京都山科の一燈園で春期幹事会が開催され、全国から43名が参加した。会議に先立ち、学校法人燈影学園、一燈園小・中・高校の相校長先生の案内で見学、午後から会議、相先生の講演、そして場所を変え、懇親会（44名参加）、希望者による二次会が祇園で行われた。翌日は京都御所の迎賓館を見学した。



学園内を説明される相先生



一燈園校舎



幹事会で山岡会長挨拶



河合さん（右）のフルート奏者



作詞作曲の檜原宏明君（中央）
と奥様（左）



京都御所内庭園

春期幹事会、懇親会に出席して

2016年文学部卒 檜原宏明

5月26日、全国通信三田会の幹事会にオブザーバーとして初めて出席致しました。きっかけは広島通信三田会の迫田会長からお誘いを受けたことです。この春は丁度私が作詞作曲した「一度きりの恋」がインターナショナルミュージックから全国発売されたところでした。それも是非宣伝してみてくださいとのことで、曲と同時に自分自身を三田会の多くの先輩に知って頂くいいチャンスだと思い参加することを決めました。会場の一燈園はとても不思議な所で、相大二郎先輩のご案内で施設や美しい庭園を見学しながら、「どうして今私はこうしているんだろう？」と日常の喧騒から離れたニュートラルな地点から自分を見つめ直すきっかけを持ってました。相先輩の講演では一燈園の創設者、西田天香の数奇な人生が語られました。宿もお金も無い一人の青年の許に多くの人が集まり今日まで続く学園ができるというストーリーには驚き、感銘を受けました。

懇親会では京都ガーデンパレスに所を替え、おいしい夕食を頂きながら歓談の中、「一度きりの恋」が河合久美子さんのフルート演奏とその音楽仲間の方の歌唱で披露されました。多くの方に興味深く聴いて頂けたようで、作り手として嬉しいです。

翌日の京都御所散策にも夫婦で参加しました。両日をきっかけに塾員同士の縁も広まり、卒業してからこそと言われる慶應ライフの入り口に立ちつつあるのかなと感じています。皆様に感謝の気持ちです。福山に戻り気持ちを新たに日々励みたいです

(注) 懇親会参加の写真は上記

私の近況

昭和 59 年 文学部卒 奥田 浩久

3年前地元の県立高校の校長として、退職を迎えた。退職後の人生設計は、教職の延長ではなく、新しいことに挑戦したいと考えていた。幸い地元の図書館で館長を募集しているということで、「尾道市立向島こども図書館」に館長として勤務することになった。図書館活動を通して、社会教育に関わりたいと願い、3年間経過した。

その間2年目には、美術鑑賞が趣味の私は学びたかった「学芸員」の資格を京都造形芸術大学の通信教育で取得することができた。若い人たちと一緒に5日間の長野県美術館実習は特に懐かしい思い出である。

退職3年目には、図書館司書の資格取得をした。図書館で勤務しながら、司書資格がないのは良くないとの思いと、学芸員取得で感じた学ぶ楽しみを継続したいという気持ちからだった。八州学園大学の通信で1年間、すべての科目(15科目・29単位)を取得するのは結構ハードであったが、なんとか3月末に全単位を取得することができた。目標を達成した時の喜びと充実感は格別であった。

今年度から私は転勤し、尾道市立中央図書館長として勤務している。市内の他の4図書館を束ねながら、中央図書館長として尾道文化を発信する立場となった。通信教育で学んだ「図書館司書資格」は現在の業務に大変役立つとともに、「学芸員」取得で学んだことも大いに役立っている。還暦を過ぎ通信教育で二つの資格取得の勉強が出来たのは、若い時期慶応大学通信教育で学ぶ楽しさを知ったことが大きな要因となっているかもしれない。

また、皆さん江戸後期に活躍した尾道の女性画家^{ひらたぎよくおん}「平田玉蘊」を知っていますか。(今春「奥田元宋・小由女美術館」で「平田玉蘊展」を開催された。)私は20年来の平田玉蘊の愛好家で、会員として活動してきたが、今年度6月より顕彰会会長として会の運営を担う重責を与えられた。顕彰会として平田玉蘊の画業を県内だけでなく、全国に発信して、江戸時代を代表する女性画家の一人と評価を高めるよう活動したいと考えている。

私の好きな言葉に伊能忠敬の「人生二山^{ふたやま}」という言葉がある。伊能忠敬は有能な商人として家業を盛り立てた後引退し、今度は興味のある算術や地図作りについてゼロから学び始め、日本全図を完成させた。「人生二山」とは自分の人生で一つの山を築くことで満足せず、第二の人生でもうひと山をつくる気概を持って、という教えである。

私も教職を退職し第二の人生をスタートさせた。伊能忠敬のような偉大な仕事は出来ないかもしれないが、自分なりに新しい世界(図書館・顕彰会)に挑戦し、社会に貢献する仕事をしたいと奮闘中である。

過疎地のまちづくり

昭和43年 法学部政治学科卒

迫田 勲

1、帰郷とまちづくりに拘わる経緯

私が住む広島市安佐北区安佐町小河内地区（以下、当地区と略す）は、広島市北端の地に234世帯、420人（平成30年3月末）が暮らす小さな山間の地区。市内中心部から車で約1時間という比較的至近距離にありながら、急峻な地形に道路交通網と情報通信網の脆弱、地区内に働く場がない等から若者が流失、少子化（年少率1・4%）と高齢化（高齢率60%）が進む、市内有数の過疎地。平成16年、長年一人暮らしをしていた母の看護のため帰郷。実家に居を移し生活を始めてみて、40数年振りに見た光景は、人影は少なく、通った小学校も中学校もなくなり、農地は山を化し、余りにももの荒廃振りに驚嘆、浦島太郎の感であった。そしてこれが（経済）戦争に敗れた姿を詠んだ杜甫の「国破れて山河あり」か、と思った。帰郷して半年後、地区社会福祉協議会から事務局をやってくれないか、とのお話があり、長年一人暮らしをしていた母が地区に大変世話になり、このお返しをすることが母の願いであり、遺言のように聞いていたのと故郷に為に何かしたい思いもあったので仕事の内容は分らなかったがOKの即答をした。これが地区の活動をするきっかけとなった。以後、社協や自治会等の会長を務めることになり平成20年末、地区の各種団体長が集まり、過疎化で疲弊している地区を活性化するためには“攻め”のことが必要と考え、「小河内を考えるプロジェクト」＝「O（お一）プロジェクト」を立ち上げ、行政の指導や支援を受け、まちづくり活動を開始した。その活動を継続、責任体制を図るため、平成23年4月、地区の各種団体長らとNPO法人「小河内Oプロジェクト」（以下、当法人と略す）を設立した。

2、地方消滅の危機と人口の東京一極集中

人口の東京一極集中が続き、2014年5月、日本創生会議が2040年に896の市区町村（これは全国の約半分）が消滅の可能性があるとして指摘し、地方創生が重要な国政課題になった。消滅の可能性とは、ある基準以下が予想される人口減の自治体は将来、行政サービスなどの維持が困難（消滅）になる、という意味。今年5月初めの読売新聞の報道によると当初の予想よりも地方の人口減少が進み、8割で加速している、地方は人口減少という「静かなる有事」（野田総務相）が目に見える形で加速している実態が明らかになった、という。そして現在の自治体のみでは運営できなくなり、今の自治体の垣根を越えて近隣自治体で役割分担をする「連携中枢都市圏」形成が検討（今年6月末、札幌市、千葉市、新潟市、福山市が広域連携のモデル都市に選定された）市町村の枠組みを見直す時期に来ている、これらの自治体は近い将来、廃止される可能性がある、という。生活に直結する地方自治が大きく変わるだろう。

余談であるが、この現象は地方の通信三田会に極似している。地方の通信三田会は、卒業生がいない（居ても極少数、それも入会するか、否かは不明）状態が長く続いており通信三田会も「静かなる有事」が始まっている。今の県単位という垣根を越えて近隣が一緒になるか、組織として名目上存続しても実質活動は個人単位になるか、である。ブロック毎に行われている合同大会が瀬戸田地域連絡部長（当時）を中心とする関係者の熱意と努力により、全国幹事会と並ぶ大きな行事になっている。これが地方塾員の掘り起こしに繋がり活性化することに意義がある。

日本の人口も学生（卒業生）も東京（圏）に集中している。東京23区内大学の定員増を原則10年間認

めない地方大学振興法（通信教育は対象外）は、大学進学で地方から東京に流れている若者に歯止めをかける試みだ。東京への入学数を制限すれば、その後の就職や結婚、子供の入園（学）による東京の人口増にブレーキをかける狙いがある。教育の観点から、個人の自由であるべき、大学選択に抑制（間接的に）をかけること如何かと思が、地方に未来を担う人財が残され、地方が活性化されることはいいことだ。塾生時代、政治学講座で教授から政治とは「電車の自分が座っている座席から見て、前の座席シートのか所が混んでいる場合、空いているシートの方へ乗客を誘導するようなものである」と話された。

国土の均衡ある発展、維持のためには、人口の適性配置による過疎過密の解消が必要である。

私も若い時は東京に憧れ東京に出ていったが、当時（昭和30年代半ば）我が国は高度経済成長期をまっしぐらに驀進中、経済第一という画一的な価値観で猫も杓子も農村から都会へ、地方から東京へ、と民族の大移動が始まっていた。この時期、東京は毎年30万人の人口が増えていた。つまり東京は毎年毎年30万人都市が誕生していることになる。

その分、地方の人口が急減、半世紀経った今日、地方は消滅の危機となった。

3、田舎の資源を活かした活性化対策

(1)「田舎暮らし体験塾」

経済や社会が成熟し、人の価値観が多様化、生き方やライフスタイルが多様化している今日、自然や農業、素朴な暮らしを求めて都市に住む若者や定年退職者を中心に田舎志向、田園回帰が始まっている。

こうした潮流を捉え、当法人は平成27年5月「田舎暮らし体験塾」を設立、農業や田舎暮らしに関心がある、まちおこしの社会貢献をしたい等、志ある都市住民を募集、応募した29名の塾生に地元民が指導や講師役になり、農業や田舎の暮らし、文化等、年間10回のカリキュラムを体験、交流した。地元民も塾生から都会の新鮮な情報や違う価値観を学び「半学半教」で対等、WIN-WINの関係で交流した。

この塾生のアンケートによると、空気や水が美味しい、食べ物の消費地から生産地（農業、食べ物の保存や加工文化等）の暮らしがしたい、便利で快適な暮らしから不便で自然に任せた暮らしに憧れている、無機質な暮らしから生き生きとした感動ある暮らしがしたい等々、田舎人にはあたり前で本気か？と、いうような回答があった。

娯楽施設は愚か、食堂も、学校もスーパーも病院もない、バスは1時間に1本もあるかないか、小河内（おがうち=しょう・が・ない）ところです、と冗談を云ったら、本気でそれが魅力ですという。本物の暮らしを求めているのであろう。

地区民から「小河内には何もないところよ」と聞くが、何もないどころか、生きていくために必要な全て（食べ物、水、燃料=薪）がある。食いはぐれになることはない。戦後の極端な食糧事情の時、田舎は贅沢が出来なかったが、食べものに困ることはなかった。

(2) 空き家バンク

農業や田舎の暮らしを体験する内、塾生から移住やセカンドハウス希望者が現われ始めた、空き家情報を広く発信、受け入れるため、昨年「空き家バンク」を設立、広島県のホームページ（みんと）にアップした。早速、2世帯が移住、1世帯がセカンドハウスとして契約した。以下、その概要である。

① 移住者A（30代の独身男性）の事例：

移住前、広島市内中心部のマンションを月額7万円（駐車場込）で借用していたが、当地の2階建て空き家（1階5部屋、2階4部屋、駐車場、農地付）を月額1万円で契約、裏にさくら並木と小河内川があり、自宅から花見やホテル見物、魚釣りもできる。自治会に加入、清掃活動や祭りの神輿担ぎに参加、地区に

溶け込んでいる。静かで星空がきれい、との感想。通勤は車で渋滞も信号待ちも少なく約40分。市内の時と変わらない。

② 移住者B（50代の夫婦）の事例

県道から1・5km入った当地内でも最も進んだ過疎地（3世帯5人が暮らす集落）である。

手入れが行き届いた立派な古民家（平屋母屋、2階建て納屋、倉庫）、家財道具や農機具（トラクター、コンバイン、草刈り機等）、農地約3反（3000㎡）、果樹（柿、ゆず）、水洗トイレ、豊富な自然水（山水）、五右衛門風呂、等で月額7000円。所有者は管理してもらっただけでありがたい、タダでいい、と言っていたが、入居者が自発的に税金や火災保険料として7000円で契約した。自営業（水道工事）のため、自宅から仕事のある職場へ行くので、転居しても変わらない。多くの材料や道具類を置く場所があり、良かった。春自宅前の庭で花見をした時、市内から来た友人が絶勝、転居したいと言っていた。

唯、今年の冬の雪（数回40cm積雪）にはびっくりした。

③ 二地域居住者（50代男性、セカンドハウス使用）の事例

市内に自宅と職場。主に週末に別荘として使用。2階建て住宅、農地付きで月額5000円。

県道から狭い道を1km入った集落に3世帯、5人が暮らす山の中の一軒家、寂しいところであるが、眼前から登る朝日を浴び、秀麗な牛頭山（689m）を眺め、市内では見られない美しい星空を眺め、等景観は抜群の地。庭に花を植え、野菜づくりや裏山でシイタケづくり、友達を呼んでBBQ、等田舎暮らしを楽しむ。唯、熊が出るので注意が必要。

④ 課題・・・空き家の登録件数が少ない

数名の塾生が希望しているが、空き家提供（登録）件数が少ない。又空き家の場所や程度等、希望者の条件に合わず、マッチングが少ない。

1年以上も使用していない、1年にお盆のお墓参り時の数日しか使用しない、長い間使用していない為かなりの修理代がかかる等の空き家を含めれば、40~50軒あるが、荷物や仏壇がある、入所（院）中の親が活着している間はそのままにしておきたい、等の理由で物件提供が進まない。最近、地区外に住む所有者は、空き家を持っていてもその維持管理や周辺の草刈、近隣との付き合い等、経済的にも精神的に大変だ、と「負動産」の意識が芽生え始めたようだ。空き家を資源として有効に活用されている事例が紹介されている一方、放置して社会問題になっていることもニュースになっている。

4、「おがうち探検隊TEVENT」

平成27年度より29年度まで開講した「田舎暮らし体験塾」は3年を区切りに閉講した。

空き家への移住やセカンドハウス使用、空き家（弥太郎ハウス）を活動拠点に改修、農業や田舎の暮らし、地区民との交流、等が進み、小河内ファンが誕生、関係人口が形成された。

彼らはこのまま残って何かしたい、と引き続き塾生の有志が任意団体「おがうち探検隊TEVENT」を結成し、下記活動を開始した。「TEVENT」はボランティアの手弁当の（T）とEVENT（イベント）を組み合わせた造語。官から民へ自主的な活動である。

活動	地域貢献	協力者
農業	耕作放棄地の活用	小河内活力農業就農者、地区民
DIY	空き家の活用	小河内空き家バンク
ECO・環境	地域資源の活用、環境整備	小河内Oプロジェクト

5、生活の原点、本物の暮らしを求めて

当地は、名称史跡や温泉等の施設もない、地図に何もない田舎であるが、この3年間延べ約500人の塾生（都市住民）が通った。彼らは地元民の指導や講師役で農業や地区の伝統行事、イベント等に参加、相互の信頼関係やコミュニティーが醸成され、第2の故郷意識が芽生え、所謂「関係人口」と呼ばれるようになった。過疎地は裏がえせば、汚染されない豊かな自然、景観、農村の原風景、農村文化、素朴な暮らし、生きる力を備えた人財、温かい人情等が残っている貴重な地と云える。確かに生活は不便であり地味であるが、きれいな空気を吸い、自らの汗で匂いのものを手に入れることができる、そこには生活の原点、本物の暮らしがあるように思う。彼らはそれを求めているのではないか。農村の問題は都市の問題、都市の問題は農村の問題に繋がる。政治、経済、文化、情報、人口等、全てが東京に集中、この東京1本「一人勝ち」で支える国家はリスクが多く未来はない、地方が元気になり複数の柱で支える国家が繁栄し安全である。「大規模集中の終わりが始まった」（藤山浩氏）という識者もいる。島根県海士町のように優れたリーダーのもと創意工夫している町は住民の2割がIターン、という事例もある。地方には生かせば多くの魅力がある、それを生かすのが地方創生だろう。問題解決の鍵は現場にある。

広島文化・自然と慶応社中に感謝

全国通信三田会顧問、岡山県通信三田会名誉会長
明石旭弘（憲彦）昭和34年経済学部卒

広島通信三田会報「みやじま」を毎号有難く拝読しています。広島での全国幹事会、小旅行や中四国福山大会、尾道や出雲での交流会など懐かしく思い起こしています。

私は4歳から5歳の頃、岡山から呉市西二河通りに転居、二河小3年生の時、四国松山に引越し、小4年の夏広島県三次市に転じ、早速少年団の早朝宮参りに参加しました。

三次は江の川系の馬洗川、西城川、可愛川に囲まれ、水泳が盛ん、全く未経験で弱小体力の私は大変苦労した。直ぐ多くの親友ができ、昭和17年12月（小5）高粱へ転居してからも長く文通を続けた。Uは山口大学へ進学、優秀で体力のあったTは広島原爆で死没、岡山で再会したYも原爆で没、冥福を祈っている。5歳の頃呉二河川に浮かんでいた行李に乗って遊んでいたら沈没、溺れて泣いて帰ったこと、友人Fの家（旅館）で出征直前の青年が自殺したこと、呉税務署へ父の弁当を毎日届けに行ったことなど多くの思い出がある。呉に鎮守府や海軍工廠があり、軍港の町として発展した。海軍佐官級の子女が数名クラスにあり、度々尋ね本を読ませてもらったりしていた。毎日共に登校したいと丘の上の呉一中（現三津田高）に上がり運動場で遊んでいた。親友Uは早くから上阪、度々尋ね泊まったりしていたが数年前病没誠に残念、冥福を祈っている。

平成29年8月末、広島駅9時発の芸備線に乗車、窓外の山野河水の風光明媚を楽しみながら第二の故郷三次へ。レンタサイクルで十日市の街並みを観察しながら快走、巴橋を渡って三次小学校へ。運動会や遠足、河原から石や砂を何度も校庭に運んだこと、ランドセルを二階から投げ落とし弁当箱が潰れたこと、男女組のT子と共に副級長になり同席に並んだこと、双葉山の70連勝を阻んだ安芸ノ海の地方相撲が三次で催されたこと等多くの思い出が頭の中を走馬灯の如く駆け巡り暫く瞑想に耽った。尾関山公園~三次中~旭橋から反転、三次の街並みを観光しながら徐行。三次で初めて内風呂のある二階家に入居、

裏手に未開通の三江線の陸橋が南北に走っていた。

それを目標に行ったが分からず、巴橋からことぶき橋へ。国道183号線を東へ、自動車街から駅前を通過し、三次高校（運動会見学を回想）内を周遊、国道375線から三度巴橋へ。

足が動かない程度疲れ「CCプラザ」で休憩。三江線への乗車を諦めて、16時3分発（快速）広島行で帰途に。松山の臭く不味い飯から解放されたものの、三次では更に食料事情が悪化、果物、卵肉野菜等長い行列に並んでも入手が困難だった。以来、空腹の苦しむ状態が戦後も長く続く。呉、三次、松山、高梁の学校、友達と全て良い思い出に包まれているが、最後の西大寺は学校、家庭全て最悪、苦難が長く続く。鎌倉幕府創設以、来承久の乱、蒙古襲来を機に多くの武士が東国から西国に移住してくる。岡山県へ松田、三村、庄、三浦等地頭の入国に対し、広島県へは小早川、三善、大庭、阿曾沼、多賀谷、熊谷、武田、毛利、吉川、長井田総、山内首藤、多賀山、廣澤和智、江田、三吉、香川、平賀等諸氏と圧倒的に多い。これら諸豪は室町末期～戦国期、謀略や攻防の戦乱の中興亡を続けやがて、毛利氏の中国地方統一に吸収されていった。江戸時代、将軍の代替わりや慶事に際し、朝鮮通信使が国書を携えて来日した。400人～500人の大使団は瀬戸内海を航行、広島は蒲刈、鞆の浦、岡山の津井、牛窓等に寄港、大歓迎を受けた。迎える広島、岡山等の諸藩は接待に莫大な出費強いられ、農民等にも負担がのしかかった。広島、岡山両藩は王政復古に重要な役割を果たしたが新政には薩長土肥に遅れを取った。しかし首相に広島は加藤友三郎、池田勇人、宮澤喜一、岡山は平沼騏一郎と犬養毅、橋本龍太郎の2人の慶應人輩出している。

塾 情 報

2018年4月通信教育課程の新規入学者数

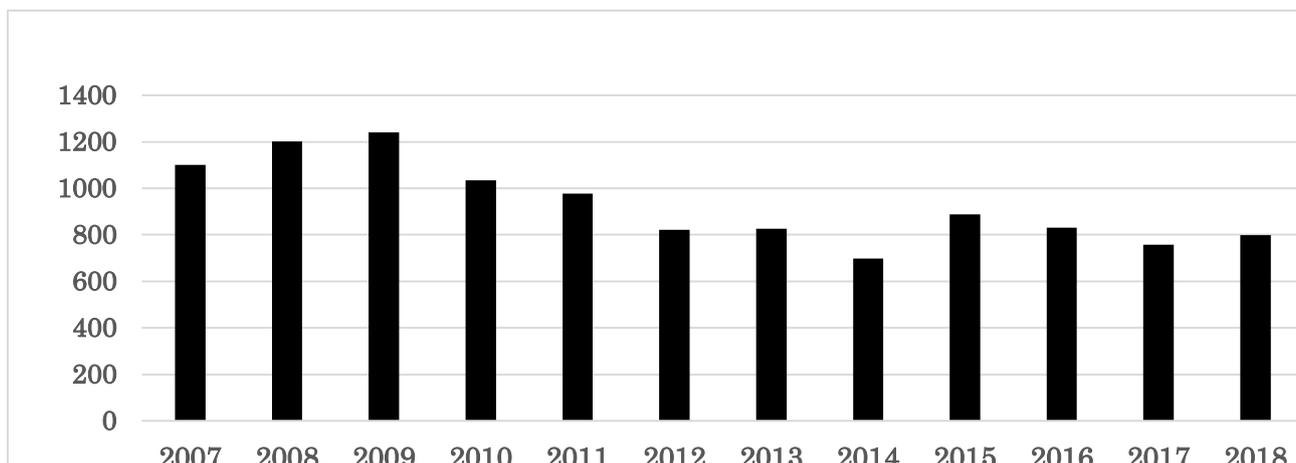
（阿部渉外部長より提供いただいた資料を引用）

	男	女	合計
文学部第1類	71	98	169
第2類	31	26	57
第3類	24	59	83
経済学部	194	99	293
法学部 甲類	82	49	131
乙類	42	23	65
合計	444	354	798

出所：慶應義塾大学通信教育部『ニューズレター慶應通信 2018年6月』を一部加工

入学生の推移

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012
入学者数	1,101	1,202	1,241	1,035	978	821
年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018
入学者数	827	698	888	831	758	798



広島慶應倶楽部総会、懇親会（広島慶應倶楽部主催）

日時 平成30年7月23日（月）18:00～21:00

場所 ANAクラウンプラザホテル広島3階

会費 10,000円

総会、長谷山塾長の特別講演、懇親会

毎年250人前後（通信関係は10人前後）の塾員が参加、盛大且つは華やかである。是非ご参加を。

編集後記

塾通信教育部への入学者数が2008年に比べ10年後の2018年は約34%減、全体に減少傾向にある。地方の大学も若者の減少から危機感を持ち、大学の特色を出し、PRに力を入れている。通学課程の入学後のエスカレーター式のカリキュラムと違い、通信教育は自ら学ぶ、という強い意志と努力がいる。レポートを書いて送る、結果をみて科目試験、スクーリングと、面倒なことが多い。どうしても慶應に行きたい（行きたかった）が、何らかの事情で行けない（行けなかった）人が慶應の通信に行く。従って、入学生（量）は少なくなるが卒業生（質）が高まっている傾向にあるようだ。瀬戸田君が紹介しているように、福澤先生は「人間交際」の重要性から「三田会」という情報交換のネットワーク組織を作られた。情報源は人、三田会はその宝庫。三田会に参加してみないと、慶應の良さは分からない。この春の幹事会に初めて参加した檜原宏明君が参加のきっかけや卒業してからこそと言われる慶應ライフの入り口に立った、と感想を述べている。奥田浩久君の「図書館司書資格」「学芸員」を通信で取得、「人生二山」に希望と感銘をうけた。岡山通信三田会明石旭弘名誉会長から子供時代広島県内で過ごされた思い出や広島、岡山県の塾出身の総理大臣を紹介、花を添えていただきありがとうございました。

慶應義塾大学 広島通信三田会報 みやじま 第54号

発行・編集 広島通信三田会 会長 迫田 勲

〒731-1171 広島市安佐北区安佐町小河内1448番地

E-mail i-sakoda@h9.dion.ne.jp

発行 平成30年7月10日